ボドー事件とロシアの反ボリシェヴィキ派

青　木　雅　浩

はじめに
１．モンゴル人民政府の成立とボドー事件
２．ボドー事件における反ボリシェヴィキ派
おわりに

はじめに

ロシア革命後のロシア内戦と列強の干渉戦争がもたらした混乱は、モンゴル人社会に大きな動揺をもたらした。この混乱の中から、1921年７月、外モンゴル[1]のフレー[2]に、モンゴル人民党（以下、「人民党」と表記する）を中心としてモンゴル人民政府（以下、「人民政府」と表記する）が成立した。

しかし、人民政府が成立しても、ロシア革命後の混乱の影響が外モンゴルで直ちに消えたわけではなかった。1920年代前半、ロシアの反ボリシェヴィキ派[3]、所謂ロシア白軍の一部は、満洲をはじめ各地に逃れて活動していた。日本と結んでソヴィエト・ロシア[4]と戦い、モンゴルとも関係を持ったГ. М. セミョーノフも、まだ健在であった。また、人民政府成立以降、ソヴィエト・ロシアが、人民政府の国家建設に本格的に関与するようになった。このため、ソヴィエト・ロシアと反ボリシェヴィキ派の対立は、人民政府成立後も、外モンゴルの政治情勢を揺るがす可能性を持ったはずである。

モンゴルに対するロシア革命後の混乱の影響について、先行研究では、「大モンゴル国」

1　現在のモンゴル国の範囲に概ね相当する地域。本稿では、地理的概念として、現在のモンゴル国に相当する地域を「外モンゴル」と表記する。

2　現在のオラーンバートル。

3　本稿では、ロシア内戦と列強の干渉戦争において、ソヴィエト・ロシアと戦ったロシアの勢力を、このように呼称する。

4　本稿では、ロシア革命の結果ロシアに成立したソヴィエト政権を、1922年末までは「ソヴィエト・ロシア」、それ以降は「ソ連」、両者を総合して表記する場合には便宜的に「ソヴィエト」と表記する。

建国運動[5]と、P. Ф. フォン・ウンゲルン・シュテルンベルグ[6]、A. C. バキチ[7]らの外モンゴルにおける活動が主として研究されてきた[8]。一方、人民政府成立後の外モンゴルの政治情勢に対する反ボリシェヴィキ派の影響については、研究が進んでいない。

外モンゴルの政治情勢の解明には、政治事件の分析が重要な意義を持つ。人民政府成立後に発生した重要な政治事件が、ボドー事件である。ボドー事件は、人民党、人民政府の指導者の１人であったボドー[9]が 1922 年１月に政府を追われ、同年８月に逮捕、粛清される、という一連の過程からなる。先行研究ではボドー事件について、ボドーら反革命を革命勢力が打倒した闘いと考える研究[10]や、モンゴル人政治家間の政治闘争によってこの事件が発生した[11]と見なす研究が発表されてきた。一方、ボドー事件とソヴィエト・ロシアの関係については、事件にソヴィエト・ロシアが関係した可能性が示唆されるに留まり、実態は不明であった[12]。

筆者は、ソヴィエト・ロシアに対するボドーの不満と、それに対するソヴィエト・ロシア外務人民委員部モンゴル駐在全権副代表 A. Я. オフチン[13]の反発が事件の引き金になっ

---

5 「大モンゴル国運動」に関する研究については、註 19 を参照されたい。

6 ロシア帝国の軍人。日露戦争、第一次世界大戦に従軍し、ロシア革命後はセミョーノフと共にソヴィエト・ロシアに反抗して戦った。1920 年夏、セミョーノフと別れて軍を率いて外モンゴルに入った。外モンゴル自治政府の復興に尽力したが、ソヴィエト・ロシア軍との戦いに敗れ、やがて逮捕、処刑された。

7 バキチは、モンテネグロ出身のロシア帝国の軍人である。ロシア革命後、ボリシェヴィキに反抗してソヴィエト・ロシア軍と戦ったが、やがて中央アジアを東方へ退き、新疆、西モンゴルに至った。

8 とりわけ、近年、ウンゲルンら外モンゴルにおける反ボリシェヴィキ派に関する専著が公刊され、彼らの活動の詳細が明らかになった（Белов2003 pp.39-191、Кузьмин2011 pp.156-324、Ганин2004 pp.167-171、Цветков2019 pp.752-789）。

9 ボドーは、人民党創立者の１人である。通訳学校の教師を務め、また社会運動に身を投じた。外モンゴル自治廃止を受け、自治復興を目指すグループを形成した。人民政府では首相、外務相を務めた。

10 例えば、БНМАУ3 pp.201-202、Bawden1968 pp.254-255、Rupen1964 p.192 等。

11 例えば、二木1995 p.249、Баабар1996 pp.279, 281-282, 285-286、Бат-Очир1991 pp.24, 31-33, 47-48, 50-51、Батсайхан2007 pp.181-186、Дамдинжав2006 pp.17-19, 21、Даш1990 pp.21, 34-36、МУТ5 p.146、Ширэндэв1999 pp.352-353、ИМ pp.70-71、Рощин1999 pp.58-60、Dashpurev/Soni1992 pp.10-24、Sandag/Kendall2000 pp.31, 53 等。

12 例えば、Баабар1996 p.286、Дамдинжав2006 pp.20-21、Рощин1999 p.59、Dashpurev/Soni1992 pp.10-24、Sandag/Kendall2000 pp.29-36 等。

13 A. Я. オフチン（本当の姓はユロフ）は、ロシア社会民主労働党プスコフ県委員会委員長、東部戦線政治課課長代理、リャザン・ウラル鉄道政治課課長等の職務を果たした後、1921-1922 年にモンゴル駐在ソヴィエト・ロシア外務人民委員部全権副代表を務めた（Рощин2002 p.106、寺山

たことを指摘し、事件の実態を解明した[14]。但し、筆者の以前の研究では、ボドー事件の実態を外モンゴルとソヴィエト・ロシアの関係から解明することを目的とし、事件と国際情勢の関係を必ずしも詳細に追究したわけではない。だが、ボドー事件の際に、ボドーらは国外、特に満洲の勢力と関係を築こうとしたと考えられていた[15]。このことから、ロシア革命後の混乱した国外情勢が、ボドー事件に反映したことが推測される。ボドー事件を国外情勢との関係からもう一度検討することにより、人民政府成立初期の政治情勢に国外情勢がどう影響し、人民政府は如何なる国外情勢の影響の下にモンゴル人国家建設を始めたのかを解明できるであろう。

また、以前筆者は、満洲が外モンゴルにとって危険な地域であると、人民政府、ソヴィエト・ロシア双方が認識していたことを検討した。以前の検討では、安全保障の観点と、満洲の張作霖、反ボリシェヴィキ派の存在から、ソヴィエト・ロシア、モンゴル人政治家が危険性を感じたことを指摘しただけに留まっている[16]。ボドー事件と満洲の情勢の関係性を具体的に検討することにより、このような満洲に対する警戒感がどう形成されたかを解明することもできるであろう。

以上の問題意識から、本稿では、ボドー事件におけるソヴィエト・ロシア側の中心人物であるオフチンが、ボドー事件に対応する際に反ボリシェヴィキ派の動向をどう認識し、事件と結び付けたかを検討する。また、満洲の情勢に対するソヴィエト・ロシアの他の政治家達の認識や、人民党、人民政府の指導者であったエルベグドルジ・リンチノ[17]の認識も合わせて検討する。これらの検討を通じて、人民政府成立初期において、外モンゴルの政治情勢に国外情勢がどう影響したかを考察する。

本稿で用いる史料は、主としてモンゴル国及びロシア連邦の文書館に所蔵されている公文書史料と刊行史料集である。また、宮崎県立図書館所蔵黒木親慶[18]文書も用いる。この

2017 注 p.29)。1923 年 11 月 24 日付のモンゴル駐在共産主義青年インターナショナル代表 A. Г. スタルコフ作成の資料「モンゴル人民党第 1 回大会」(1923 年に開催された人民党大会に関する報告書) では、1922 年初頭のオフチンを「外務人民委員部代表、コミンテルン代表」と表現している (РГАСПИ, Ф. 495, ОП. 152, Д. 19, Л. 2.)。このことから、ボドー事件時、オフチンは外モンゴルにおけるソヴィエト・ロシア、コミンテルンの活動を指導する立場にあったと考えられる。

14　青木 2011 pp.107-160.

15　青木 2011 pp.129-144.

16　青木 2011 pp.30-34、青木 2015 pp.212-215.

17　ブリヤート・モンゴルの知識人。ロシアで高等教育を受け、社会運動に身を投じた。ロシア革命時、「大モンゴル国」建国運動に関与した後、ソヴィエト・ロシア、コミンテルンと関係を持ち、人民党の活動に深く関与した。彼の活動の場はブリヤートだけでなく、外モンゴルにも及んだ。人民政府成立後、政府の軍事を統括し、政治的にも強い影響力を有する全軍評議会議長を務めた。人民党、人民政府、モンゴル人民共和国の有力な指導者の 1 人である。

18　日本陸軍の軍人。日露戦争、日本軍のシベリア出兵に従軍した。シベリア出兵時、セミョーノフ

文書は、黒木の書簡、文書等の集成であり、セミョーノフから送られた文書も含まれる。

１．モンゴル人民政府の成立とボドー事件

本節では、人民政府成立の過程と、その後発生したボドー事件とソヴィエト・ロシアの関係について概観する。

（１）ボグド・ハーン政権からモンゴル人民政府へ

1911 年 12 月、外モンゴルの王公、高位僧、内モンゴル等のモンゴル人が、モンゴル人国家の建設を目指し、外モンゴルで著名な化身８世ジェブツンダムバ・ホトクトを国家元首ボグド・ハーンとして戴くボグド・ハーン政権をフレーに形成した。

ボグド・ハーン政権は、外モンゴル以外の地域のモンゴル人も取り込み、国際的に独立国家として承認されるべく活動した。だが、ボグド・ハーン政権、ロシア帝国、中華民国間の交渉の結果、1915 年のキャフタ三国協定により、ボグド・ハーン政権の地位は、中華民国の宗主権下の外モンゴルのみの自治に定められた。こうして、ボグド・ハーン政権は、外モンゴル自治政府として自治を享受することとなった。

ロシア革命後発生したロシア内戦と列強の干渉戦争による混乱は、東北アジアのモンゴル人社会に大きな影響を与えた。ザバイカル地域のリンチノらブリヤート・モンゴル知識人は、日本軍、セミョーノフと手を結んで「大モンゴル国」建国運動を興した。彼らは、フルンボイル、内モンゴル、外モンゴルのモンゴル人を含めた国家を建設すべく活動した。だが、日本軍の援助中止、セミョーノフとブリヤート・モンゴル知識人の対立、外モンゴルの不参加等により、運動は失敗した[19]。

一方、ロシア帝国の崩壊を受け、中華民国は外モンゴル自治の廃止に乗り出した。その結果、1919 年 11 月の大総統令により、外モンゴル自治は廃止された。だが、中華民国の強引な手法に対して、モンゴル人社会で自治の復興を目指す運動が展開された。モンゴル人の様々な活動グループが外国に援助を要請した。この状況下、1920 年秋に、セミョーノフから離れたウンゲルンが軍を率いて外モンゴルに進入した。ウンゲルンを自治の復興に利用できると考えたモンゴル人が現れ、盛んに支援を行った。その結果、ウンゲルンは 1921 年２月にフレーを中華民国軍から解放し、彼の勢力下に外モンゴル自治政府が復興された。

の顧問となり、彼への援助を推進しようとした。

19 「大モンゴル国」建国運動の詳細については、生駒 1994 pp.192-193、原 1989 pp.487-490、二木 1997 pp.37-58、Батбаяр1998 pp.35-38、Жамсран1997 pp.108-113、Жабаева/Цэцэгмаа2006 pp.155-185、Ширэндэв1999 pp.104-106、Базаров/Жабаева2008 pp.133-173、ИМ pp.45-47、Лузянин2003 pp.82-84、Sablin2017 pp.115-146 等を参照されたい。

一方、自治の復興を目指すボドーを中心としたグループと、ダンザン[20]を中心としたグループが、1920年夏に合同して人民党を形成した。復興された外モンゴル自治政府に多くの王公、高位僧が関与したのに対して、人民党を形成したグループは、一般大衆、下級官吏を中心に構成されていた。ボドー、ダンザンら7人の人民党代表が、援助を要請するためにソヴィエト・ロシアに赴いた。彼らを受け入れたソヴィエト・ロシア、コミンテルンは、当初緩やかな援助を予定していたが、ウンゲルンの外モンゴル進入により方針を変えた。ウンゲルンが外モンゴルを勢力下に置くということは、ソヴィエト・ロシアにとって、外モンゴルが反ボリシェヴィキ派の基地となることを意味していた。こうしてソヴィエト・ロシアは、外モンゴルからのウンゲルンの排除のために、人民党への援助を本格化した。人民党はモンゴル人民義勇軍を組織し、1921年3月1－3日に党組織会議（所謂人民党第1回大会）を開催し、3月13日にはモンゴル人民臨時政府を結成した。3月18日には、ウンゲルンによりフレーを追われた中華民国軍が占領していたキャフタを解放した。その後、人民党は、ソヴィエト・ロシア赤軍、極東共和国軍と共に、北上してきたウンゲルン軍を攻撃し、やがてフレーへ向けて南下した。この結果、1921年7月10日、外モンゴル自治政府を受け継ぐ形で、フレーに人民政府が成立した[21]。

人民政府の成立と共に、外モンゴルにソヴィエト・ロシア、コミンテルンが本格的に関与するようになった。モスクワから派遣されてくる代表、顧問達が、外モンゴルの党、政府、国家の建設と運営に直接関与し、モンゴル人政治家達との間に軋轢を生んだ。1921年秋－1922年のボドー事件時には、オフチンが、外モンゴルにおけるソヴィエト・ロシア、コミンテルンの活動を指導していた。ボドー事件に対応したのも、オフチンであった。

（2）ボドー事件の概要

本稿で扱うボドー事件は、人民政府成立初期に発生した重大な政治事件である。本項では、筆者の研究に基づき、ソヴィエト・ロシアとの関係から、この事件の過程を概観する。

ボドー事件の主たる要因は、ソヴィエト・ロシアに対するボドーの反発と、ボドーとオフチンの対立であった。1921年秋、ソヴィエト・ロシア政府との友好条約締結交渉のため、ダンザンら人民政府代表団がモスクワに発った。この頃から、ボドーは、外モンゴルにおけるソヴィエト・ロシア、コミンテルンの活動を批判する運動を展開した。当時、ソ

20　人民党のもう1人の創立者ダンザンは、外モンゴル自治政府財務省の官吏であった。外モンゴル自治廃止時に、自治復興を目指すグループを仲間の官吏達と共に形成した。人民政府では、財務相等を務めた。

21　外モンゴル自治政府が復興され、人民政府が成立する過程の詳細は、橘 2011 pp.409-447 等を参照されたい。

ヴィエト・ロシア、コミンテルンの顧問達が、外モンゴルの党、政府組織の建設に関与していた。だが、ボドーはそれを、外モンゴルに対するソヴィエト・ロシアの過剰な干渉と考え、批判し始めたのである。ボドーが批判したソヴィエト・ロシア、コミンテルンの顧問、代表には、ブリヤート・モンゴル人も含まれていた。

1921 年 12 月、ボドーは人民政府会議、人民党中央委員会会議において、外モンゴルにおけるソヴィエト・ロシアの活動を公式に取り上げて批判し、自身の辞職を要求した。ソヴィエト・ロシアに対するボドーの批判的な姿勢は、オフチンの激しい反発を招いた。この頃、モスクワからフレーに戻ったダンザンらに対しても、ボドーは批判の矛先を向けた。ダンザンらは事態の詳細を知り、ボドーと対立した。この結果、1922 年１月７日にボドーと彼の支持者は人民政府の要職を辞することになった。

その後もボドーは、ソヴィエト・ロシアと人民政府に依らない外モンゴルの自立を支持者と共に模索し、活動を行っていた。これを詳細に監視していたのがオフチンであった。オフチンは、ボドーの活動を調査し、ボドーが日本、アメリカ、中国に援助を要請しようとし、外モンゴルの王公、高位僧、ボグド・ハーンと緊密な関係を持った、と考えるようになった。ボドーの活動に危機を感じたオフチンは積極的に活動し、８月３日にボドーらを逮捕した。その後の尋問を経て、ボドーらは 1922 年８月 31 日に処刑された[22]。

２．ボドー事件における反ボリシェヴィキ派

ボドー事件に対応したオフチンは、ボドーの活動を、外モンゴル領内のみに留まるものとは考えず、国外の情勢と積極的に結びつけて考えようとしていた。本節では、まず、オフチンが国外情勢とボドーの事件をどう関連付けたかを、反ボリシェヴィキ派との関連を中心に検討する。また、外モンゴル情勢と反ボリシェヴィキ派の関係について、ソヴィエト・ロシア側の認識と、人民政府の指導者リンチノの認識を合わせて検討する。これらの検討により、人民政府成立直後の外モンゴルの政治情勢と国外情勢の関係を考察する。

（１）オフチンの報告書における反ボリシェヴィキ派

オフチンは、ボドー事件の際に、外モンゴル情勢に関する報告書をソヴィエト・ロシア外務人民委員部の Л. М. カラハン宛に送っている。この報告書により、ボドー事件の進行過程や、それに対するオフチンの介入、ボドー事件時の外モンゴル情勢について知ることができる。

この内、1922 年７月８日付オフチン発カラハン宛報告書には、ボドー事件の過程、事件へのオフチンの対応、事件に関連する当時の外モンゴル情勢が詳細に記されている。ボ

22　青木 2011 pp.115-144.

ドーらの逮捕の約１か月前に作成された本報告書には、ボドー事件に対するオフチンの最終的な理解や結論と、それに基づく外モンゴル情勢への判断が書かれていると考えられる。

本項では、このオフチンの報告書を主に利用し、外モンゴルの政治情勢と反ボリシェヴィキ派の関係について考察する。

１）ボドー事件と反ボリシェヴィキ派

1922 年７月８日付オフチン発カラハン宛報告書の冒頭で、オフチンはこう述べている。

> 目下、以下に引用された事実から明らかなように、外的情勢は、モンゴルに対する実際の圧力を予期しうる程に深刻である。これが正に、我々の何らかの注意を外モンゴルにも向ける必要性について語る訳である。なぜなら、そうしなければ、我らの利害は、ここ［外モンゴル：青木］でも、シベリアでも、そして総じて極東においても、一定の脅威を受けうるのである[23]。

オフチンは、外モンゴルを巡る国外情勢の深刻さを強い調子で訴えている。記述にある「以下に引用した事実」とは、この報告書の内容そのもの、即ちボドー事件と国外情勢の関係を示す諸事実のことである。これらの記述は、オフチンが外モンゴルにおける政治事件に対応する際に、まず国外情勢との関係を考慮していたことを示すものであろう。

この報告書でオフチンは上述のように記した後、ボドー事件を含む当時の外モンゴルの状況について、1911 年以降のボグド・ハーン政権の活動から解説を始めている。ボドー事件には、ボグド・ハーン政権に関わった人々が関係している、とオフチンは認識していたのである。オフチンは、1911 年にモンゴル人が自立のための運動を興した結果として自治外モンゴルが成立したこと、中国を志向する王公、高位僧の勢力が強まったこと、ロシア革命後にこの勢力が拡大したことを述べた[24]後、外モンゴル自治の復興を目指す運動について、以下のように記述した。

> 反中国グループの中において新たな模索が始まり、その結果、北京でアメリカ公使に対して派遣されたのが、ジャルハンズ・ホトクト[25]率いる非合法的代表団であり、中国人に反抗するための援助の要請を持っていた。ボグド・ハーンに率いられる第２

23　АВПРФ Ф. 0111, ОП. 4, ПАП. 105a, Д. 1, Л. 120.

24　АВПРФ Ф. 0111, ОП. 4, ПАП. 105a, Д. 1, Л. 120、青木 2011 pp.132-133.

25　ジャルハンズ・ホトクト・ダムディンバザル。外モンゴルの仏教の有力者であり、ボグド・ハーン政権期には西モンゴルで活躍し、再興された外モンゴル自治政府では首相、内務相を務めた。人民党、人民政府に好意的な姿勢を取り、人民政府ではボドーの後に首相を務めた。

のグループ[26]は、代表団を満洲里に、つまり日本人とセミョーノフに派遣した。前者のグループがアメリカに救済を求めて何も得られなかったのに対して、後者のグループは目的を達成し、また非常によく利用された。モンゴルにウンゲルンが現れ、何の苦労もなしにほぼ全モンゴルを占領した[27]。

記述によれば、オフチンは、ウンゲルンの外モンゴル進入をボグド・ハーンのグループの活動の成果であり、ウンゲルンの背後にセミョーノフと日本がいると判断した。オフチンは、本報告書の別の箇所においても、ウンゲルンの外モンゴル進入を「より正確に言えば日本の冒険行為」と表現している[28]。

外モンゴルにおけるウンゲルンの活動に関連して、本報告書には以下の記述がある。

ウンゲルンは地域的環境と熱狂的信仰[29]に合わせるためのあらゆる努力を行い、殆ど仏教徒になり、ボグド・ハーンの完全な賛同と賞賛をも得た。しかしながら、王公と高位僧以外には誰も自分の周囲にまとめることができなかった[30]。

この記述は、ウンゲルンがボグド・ハーン、王公、高位僧の支持を集めることには成功した、とオフチンが考えていたことを示していると言えよう。オフチンの視点は、ボグド・ハーン、王公、高位僧という外モンゴルの旧来の政治支配層とウンゲルン、セミョーノフ、日本に関係があるという点に向いていると考えられる。

近年の研究により、ボグド・ハーンらが外モンゴル自治の復興のための後ろ盾として利用すべく、ウンゲルンを援助したことが明らかになった[31]。だが、ボグド・ハーンの招請がウンゲルンの外モンゴル進入を引き起こした、とは言えないようである。ボグド・ハーンが日本に送ろうとした使者は、目的を果たせず引き返している[32]。

しかし、オフチンは、ボグド・ハーン、王公、高位僧とウンゲルン、日本の間に密接な関係があるという認識に基づいて、ボドー事件に対処しようとしたのである。前節で述べ

26　実際にこの２グループが明確に分かれていたとは考え難い。ジャルハンズ・ホトクトによるアメリカへの援助要請にも、ボグド・ハーンは関与していた（橘 2011 p.409、Батсайхан2014 p.491、Кузьмин2016 pp.143-145）。

27　АВПРФ Ф. 0111, ОП. 4, ПАП. 105а, Д. 1, Л. 120-120об、Аоки2019 pp.319-320.

28　АВПРФ Ф. 0111, ОП. 4, ПАП. 105а, Д. 1, Л. 120об、Аоки2019 p.320.

29　モンゴルにおける仏教信仰の強さを、オフチンはこのように表現したようである。

30　АВПРФ Ф. 0111, ОП. 4, ПАП. 105а, Д. 1, Л. 120об.

31　橘 2011 pp.418-421、Батсайхан2014 pp.493-508、Белов2003 pp.44-58、Кузьмин2011 pp.156-227、Кузьмин2016 pp.145-159.

32　橘 2011 p.412、Батсайхан2014 p.491、Кузьмин2016 p.143.

た通り、オフチンは、ボドーが王公、高位僧、ボグド・ハーンと密接な関係を持った、と考えていた。オフチンは、ウンゲルンや日本と関係を持つ勢力とボドーが関係を持とうとしたと考えたのであろう。

オフチンは、外モンゴルに直接進入したウンゲルン以外に、セミョーノフらも外モンゴルへの関与を試みている、と認識していた。1922年7月8日付オフチン発カラハン宛報告書には以下の記述がある。

> 他方、モンゴル情勢でさらに新たな事情が明らかになっている。ここ数日で私は中国から以下の連絡を受けた。中国を再び来訪して現在天津に滞在中のセミョーノフも、モンゴル問題の検討に従事している、と。…逃亡したハルハ[33]の王公数人がセミョーノフと結びついている、という情報がある。6月[34]末、ウルガ[35]でシリニコフ[36]将軍の檄文を受け取った。この檄文はモンゴル人宛である。そして、共産主義者はロシア大衆に無数の災難をもたらし、これと同様のことがその影響下に陥ったモンゴル人たちにも予期されることと、共産主義者に対抗してロシアの逃亡者[37]と団結することを呼びかけている[38]。

セミョーノフがモンゴルに関わることを企図し、逃亡したハルハの王公と結びついていることを、オフチンは指摘している。また、シリニコフがモンゴル人への反共産主義の呼びかけを出し、実際にモンゴル人に働きかけていることを、オフチンは報告している。反ボリシェヴィキ派の中に、外モンゴルを利用してボリシェヴィキとの戦いを継続しようとする者がいることを、オフチンは示そうとしているのであろう。

セミョーノフと外モンゴルの王公の関係に対するオフチンの懸念は、単なる憶測に留まるものではなかったようである。1920年代前半、セミョーノフは、周囲のモンゴル人と結びつき、外モンゴルへの関与を図っていた。1923年5月26日付セミョーノフ発黒木親慶宛書簡には

> 再びモンゴル王公が日本政府宛の公的文書を持ってきた、ということがあった。だが、私は現在の日本の政策を考慮して彼を引き留め、彼は今のところ東京へは行かな

33　外モンゴルの人口の多くを占めるモンゴルの1集団。

34　1922年6月のことであろう。

35　当時ロシア人はフレーをこう呼んでいた。

36　反ボリシェヴィキ派の将軍 И. Ф. シリニコフだと推測される。

37　ソヴィエト・ロシアと戦い、ロシア国外に亡命した反ボリシェヴィキ派を指すと思われる。

38　АВПРФ Ф. 0111, ОП. 4, ПАП. 105а, Д. 1, Л. 122–122об.

いのである[39]。

とある。この文書の「モンゴル」がどこを指すのかが判然としないが、上述のオフチンの報告書に記述されたセミョーノフとモンゴルの王公のつながりが、セミョーノフ本人の文書でも確認できる。

一方、1924 年３月 15 日付「モンゴル民族代表会議[40]決議」という文書には、

ボリシェヴィキによる自国の占領、我々の神聖なる僧達、以前の指導者達と大衆に対して共産主義者達によってなされた、銃殺を含む惨禍、また我々の国に法的秩序を回復することを支援するよう我々が多くの請願を出したにも関わらず、中国当局が何もしなかったことに関連して、我々モンゴル全権代表は、自国の現在の政治的状況を協議し、以下の通り決議した。

…３．列強への請願についての指導と、独立と経済改善のためにモンゴルの利害を擁護する我々の会議の全権を引き受けるように、アタマン・セミョーノフに請願する。

彼、即ちアタマン・セミョーノフに、モンゴルにおけるありとあらゆる利権に対して、財政借款、あるいは別の種類のモンゴル住民への物資供給用に、モンゴル民族の名で条約を締結することを委任する。

４．政治的及び経済的性格のあらゆるやり取りをモンゴルの名で行うよう、郡王アルマズオチル・エルデネバートル（アタマン・セミョーノフ）に委任する。彼の指導に、我々により国外に派遣されている２人の代表を従わせている。

我々はまた、郡王アルマズオチル・エルデネバートルに、自らの行動において、本会議の決議を遵守するよう要請する[41]。

とある。外モンゴルの人間が関わっていると思われる[42]モンゴル民族代表会議が開催され、この会議がセミョーノフに、列強との交渉を行う全権を委任するよう決定したのである。

39　黒木文書マイクロフィルムリール No.1289, 244（12. 黒木親慶宛、その他、差出人不明書簡（露文）、16. 黒木親慶宛書簡）.

40　セミョーノフに近しいモンゴル人が組織した会議だと思われる。

41　黒木文書マイクロフィルムリール No.1288, 177-178（５．軍事、13. モンゴル人民代表会議の決議（露文））.

42　本文書内に、「赤軍によるモンゴル占領の時から、モンゴルに対する主権を中国が事実上喪失したことにより」という記述がある。このことから、本文書で示される「モンゴル」とは外モンゴルを指し、モンゴル民族代表団には外モンゴルの関係者が関わっていると推測される（黒木文書マイクロフィルムリール No.1288, 177）。

同日付のセミョーノフを全権代表に選出する文書でも、以下のように記されている。

> 我々モンゴル民族代表は、外国列強に対する我ら民族の利害を代表する権限について全面的な問題を協議した。そして、我らが祖国モンゴルの順調な復興のために、我々の間でこの使命を成功裏に遂行できる唯一の人物が、我らの国の歴史的過去と現在におけるモンゴル民族の願望をよく知っている者として、郡王アルマズ・オチル・エルデネ・バートル（アタマン・セミョーノフ）であることを認め、我々は満場一致で以下の通り決議した。
>
> 存在する同意に基づき、モンゴルの利害の代表権の執行のため、外国列強に対するモンゴル民族の全権代表に郡王アルマズ・オチル・エルデネ・バートル（アタマン・セミョーノフ）を選出する[43]。

1920年代前半、ソ連の外モンゴル進出に不満を抱くモンゴル人が、セミョーノフの元に集結し、セミョーノフを介して列強に訴えることを企図していたことを、これらの史料は示している。

以上の諸史料から、セミョーノフが外モンゴルへの関与を意図し、実際に活動していたことを見出すことができる。セミョーノフの自伝に、1920年代前半にセミョーノフがモンゴル人と直接関わったことを示す記述はない。だが、共産主義との統一闘争の計画を立案する際に、モンゴル人の独立への欲求を自分達の利害に利用する必要性を、張作霖に指摘したことがある、という記述は、セミョーノフの自伝に残されている[44]。1920年代前半、セミョーノフは、独立を目指すモンゴル人の活動を利用してボリシェヴィキとの対立を企図していたのである。セミョーノフの自伝の記述から、上述のモンゴル民族代表会議は、セミョーノフにとって、ソ連との戦いのためにモンゴル人を自分の元にまとめるための組織であったと思われる。

セミョーノフの自伝によると、ボドー事件時、セミョーノフは中国、カナダ、アメリカを訪問していた[45]ため、実際にボドーがセミョーノフと直接接触したとは考え難い。だが、オフチンが、1922年7月の時点でセミョーノフとモンゴル人の繋がりを察知し、これとボドーの活動が結びつくことを危惧した可能性はあると思われる。

前節で述べたように、ボドー事件の過程でオフチンは、ボドーが日本に援助を要請し

43　黒木文書マイクロフィルムリール No.1288, 179（5．軍事、13．モンゴル人民代表会議の決議（露文））．本文書は、セミョーノフが原文の写しを黒木宛に送ったものである。なお、本文書の原文には、「民族会議代表バヤルバートル公、民族会議書記トゥメンウルジー公」の署名があったようである。

44　Семенов p.265.

45　Семенов pp.254-264.

た、と認識した。既に筆者が検討した通り、1922 年７月８日付オフチン発カラハン宛報告書でオフチンは、満洲里からボドーのところへ来た急使を拘束したことから判断して、ボドーが日本に援助要請した、と記述した[46]。この記述は、1922 年７月８日付オフチン発カラハン宛報告書において、本項で論じたセミョーノフら反ボリシェヴィキ派と外モンゴルの関係に関連して記載されている。このような報告書の記述から、オフチンが、満洲里から来た急使を、日本とボドーのつながりだけではなく、反ボリシェヴィキ派とのつながりをも示唆するものとして捉えたと考えられるであろう。

以上のことから、オフチンは、ボドーの活動を、外モンゴルへの関与を試みるセミョーノフら反ボリシェヴィキ派とつながりうるものだと考え、人民政府、ソヴィエト・ロシアに対するボドーの活動の危険性を判断したと考えられる。このことは、ロシア革命後のソヴィエト・ロシアと反ボリシェヴィキ派の対立が、人民政府成立後の外モンゴルの政治事件の展開にも影響したことを示すものだと言えよう。

２）セミョーノフと張作霖の関係

上述のセミョーノフの自伝にあるようなセミョーノフと張作霖の関係について、オフチンも把握していた。そして、これを日本と結び付け、外モンゴル情勢に影響する要素と考えたようである。1922 年７月８日付オフチン発カラハン宛報告書には

> ウルガへの進軍の問題に関してセミョーノフを張作霖と結びつけるべく、日本はあらゆる努力を注いでいるようである。セミョーノフは既にこれに同意を表明し、満洲にいるが張作霖軍を構成していない、以前の自分の全ての部下に、張作霖軍の下に設立されているロシア部隊に直ちに入るよう指令を発布したようである[47]。

とある。この記述に関連して本報告書では、張作霖軍には 1922 年６月中旬の時点で約 2,000 人の白系ロシア人が加入していることと、第１次奉直戦争[48]の勝敗に関わらずフレーへの進軍が必要だという意見が白系ロシア人の間にあることも、合わせて指摘されている[49]。

この 1922 年７月８日付オフチン発カラハン宛報告書の記述にもあるように、1920 年代前半において、張作霖は外モンゴルへの進軍をたびたび企図していた[50]。1921 年７月 27 日

46　青木 2011 p.132、АВПРФ Ф. 0111, ОП. 4, ПАП. 105а, Д. 1, Л. 122об.

47　АВПРФ Ф. 0111, ОП. 4, ПАП. 105а, Д. 1, Л. 122.

48　1922 年４－５月、張作霖の奉天派と呉佩孚の直隷派が山海関で衝突し、後者が勝利した（広川 2010 p.033、スラヴィンスキー 2002 p.34 等）。

49　АВПРФ Ф. 0111, ОП. 4, ПАП. 105а, Д. 1, Л. 122.

50　広川 2010 pp.031-033.

付ソヴィエト・ロシア外務人民委員 Г. В. チチェリン発極東共和国外務相ゴリン宛文書には、中国がモンゴル遠征を企図しており、張作霖がそのために 300 万ドルを受領したことを西洋の新聞が伝えている、と記述されている[51]。1921 年 8 月 8 日付 Б. З. シュミャツキー[52]発チチェリン、ソヴィエト・ロシア外務人民委員部極東課課長 С. И. ドゥホフスキー、コミンテルン執行委員会東方局局長 М. А. トリリッセル宛文書では、張作霖が満洲里地域に兵力を集中しており、そこから外モンゴルに進軍するはずであること、張作霖の目的はウンゲルンと合同して人民政府を打倒することであること等が伝えられている[53]。

軍事的手段以外にも、張作霖は、モンゴル王公を利用した外モンゴルへの関与を試みていた。例えば、1921 年 8 月 4 日に、張作霖との戦闘を避けて友好を結びたければ、ハイラルに使者を派遣して協議するように内モンゴル各盟の王公が通知してきた文書が、人民政府内務省から人民政府に届けられている[54]。1921 年 8 月 16 日付ボドー発シュミャツキー宛文書によると、これに対して人民政府から、張作霖の外モンゴル遠征を防ぐべく、外モンゴル王公、高位僧の名で張作霖に書簡を送ったようである[55]。

以上のことから、外モンゴルに張作霖が進攻する懸念がある状況下において、オフチンは、セミョーノフ、張作霖、日本のつながりを認識し、この三者を結びつける満洲がソヴィエト・ロシア、人民政府にとって危険な地域になっているという認識を持っていたと考えられる。そして、上述のように満洲と関わりがあったボドーの活動を、オフチンはこのことと関連づけて危険視したのだと思われる。

（2）外モンゴルの情勢と反ボリシェヴィキ派に対するソヴィエト・ロシア側の認識

以上のように、オフチンは、ボドーが満洲との連絡を持ったことを、日本との関係だけではなく、反ボリシェヴィキ派、張作霖との関係からも考えていた。反ボリシェヴィキ派、張作霖に対するオフチンのこの危機意識は、他のソヴィエト・ロシアの政治家の間にも広まっていたようである。

1920 年代前半、中華民国とソヴィエトの間で国交正常化等を目的とした交渉が行われ、1924 年 5 月 31 日にカラハンと中華民国外交部長顧維鈞の間で中ソ協定が締結された。こ

51　ГХТА Ф. 2, Д. 6, Х. 8（原文の所蔵元は АВПРФ Ф. 111, ОП. 4, ПОР. 5, ПАП. 1, Л. 2）.

52　革命後のシベリア、ロシア極東において、ソヴィエト・ロシア外務人民委員部シベリア・モンゴル全権代表、ソヴィエト・ロシア赤軍第 5 軍団革命軍事評議会委員を兼任し、コミンテルン極東書記局を指導したソヴィエト・ロシア、コミンテルンの有力政治家。外モンゴルに関しても、1921 年秋までその指導力を振るった。

53　РГАСПИ Ф. 495, ОП. 154, Д. 105, Л. 65、青木 2011 p.32.

54　УТА Ф. 1, Д. 1, ХН. 32, Х. 4. この翌日の 8 月 5 日にも、張作霖に関係する内モンゴルの盟長、王公が外モンゴルの王公、高位僧宛に大量の文書を送っている（橘 2011 pp.441-442）。

55　ГХТА Ф. 2, ХН. 8, Х. 2.

の中ソ交渉の障害となった問題の１つに、外モンゴルからのソヴィエト軍の撤退問題があった。この時、ソヴィエト側は、中華民国領内に残った反ボリシェヴィキ派がモンゴル、極東共和国、ソヴィエトにとって脅威となっていることを主張していた。例えば、1922 年８月 19 日付 A. A. ヨッフェ[56] 発呉佩孚宛書簡には

> ロシアは、戦略的な考えに基づいてモンゴルへ自軍をやむなく進入させることになった。ロシアが現在までモンゴルに部隊を駐屯させておくことを余儀なくされたのは、以下の理由による。第１に、中国は、自領内に白軍徒党とそのリーダーが存在することを甘受している。これら白軍徒党とそのリーダーは、我が軍がモンゴルから撤退した後に、極東共和国の背面に対する新たな攻勢のためにモンゴルへ容易に移ってくることができる…[57]。

とある。ヨッフェは、中華民国領内に残る反ボリシェヴィキ派を脅威と認識し、彼らがモンゴルに容易に進入し、極東共和国を脅かしうる、という理由から、外モンゴルにおけるソヴィエト・ロシア赤軍駐屯の正当性を主張している[58]。

また、1922 年９月 26 日付の A. И. ゲッケル[59] と孫文の対談[60] についての Г. マリング[61] のメモには、対談中のゲッケルの発言として

> 満洲は日本の領域となっている。そこでは至る所で日本人を見かけ、張作霖がそれに居合わせるのに、時に気づいていないのです。張作霖は、ロシアの君主政主義者と協力し、ディテリヒス将軍[62] と関係を持っていない。ロシアは、満洲が第２のモンゴルになり、新たなウンゲルン共がそこでロシアへの攻撃のために支持を受けることを等閑視できない[63]。

56　ヨッフェは、ドイツ駐在ソヴィエト・ロシア大使等を務めて外交で活躍し、1922 年８月以降、中ソ公式交渉のソヴィエト・ロシア側代表として、中国で活動していた。

57　ВКНДК1 p.96.

58　青木 2011 pp.166-167.

59　ソヴィエト・ロシアにおいて軍務で活躍した人物。1922 年以降、労農赤軍軍事学校校長、中国駐在ソ連全権代表部駐在武官を務めていた。

60　この対談は 1922 年９月 26 日朝９時から孫文の家で行われた、とこのメモの冒頭に記されている（ВКНДК1 p.126.）。

61　実名は X. スネフリト。コミンテルンで活躍し、当時は中国駐在コミンテルン執行委員会代表を務めていた。

62　M. K. ディテリヒス。極東においてボリシェヴィキに反抗する将軍の１人。

63　ВКНДК1 pp.127-128.

と記されている。ここには、満洲において、日本、張作霖、反ボリシェヴィキ派が関係し合いながら、ソヴィエト・ロシアの脅威になるという認識が明示されている。

以上のように、ボドー事件が発生した1922年において、ロシア内戦と列強の干渉戦争の結果、満洲に逃れた反ボリシェヴィキ派が日本、張作霖と結びつき、ソヴィエト・ロシアにとって依然として大きな脅威として存在していた、とソヴィエト・ロシア側で考えられていたと思われる。前項までに述べたオフチンの判断の背景には、ソヴィエト・ロシア側で広まったこのような認識があったと考えるべきであろう。

（3）反ボリシェヴィキ派に対するリンチノの認識

本項では、人民党、人民政府の有力な指導者の1人であったリンチノを例に、外モンゴルに対する反ボリシェヴィキ派の影響が、人民党、人民政府でも懸念されていたことについて検討する。

この問題に関するリンチノら人民党、人民政府のモンゴル人指導層の認識は、1922年10月8日付の「コミンテルン第4回大会へ（モンゴル人民党代表報告）」に見出すことができる。本史料は、コミンテルン第4回大会のモンゴル人民党代表の報告であり、ダンザン、ヤポン・ダンザン[64]、リンチノ、ナツァグドルジ[65]の署名が付されている。だが、人民党からの依頼に基づいて、この報告を作成したのはリンチノである[66]。

この報告内の外モンゴルの政治情勢を説明した箇所に、以下の記述がある。

> …ボドーと彼の仲間、ウンゲルンの政府[67]の大臣だったツェベーン・テルグーン[68]率いるロシア白軍の支持者達は、国内の蜂起と満洲からモンゴルへのロシア白軍の呼び寄せの実行のための組織を整えていた[69]。

この記述によると、リンチノも、オフチンと同様に、ボドーの活動が満洲に逃れた反ボ

64　人民党を創設したダンザンとは別人物である。日本に行った経験があることから、ヤポン（日本）・ダンザンと呼ばれた。人民党、人民政府において重要な役割を果たした人物であり、人民党中央委員会委員長を務めた。また、中国への派遣や、ソ連駐在全権代表の職務を経験し、外交面でも活躍した。

65　ナツァグドルジは、人民党中央委員会書記、人民党中央委員会幹部等を務めた人民党の政治家である。

66　1922年10月5日付人民党中央委員会発人民政府宛文書に、コミンテルン大会での報告の作成をリンチノに委任することが記されている（YTA Ф.1, Д.1, XH.82, X.190）。

67　1921年2月に再興された外モンゴル自治政府を指す。

68　外モンゴル自治復興のためにウンゲルンに協力し、再興された外モンゴル自治政府では財務相を務めた（橘 2011 pp.418-442）。

69　РГАСПИ Ф. 495, ОП. 152, Д. 16, Л. 34、Ринчино p.60.

リシェヴィキ派と結びつく危険なものだったと見なしていたことになる。リンチノもまた、ボドー事件を、反ボリシェヴィキ派と密接に関連するものと捉えていたのである。

また、1922 年[70]のリンチノ発スフバートル[71]宛書簡に以下の記述がある。

> また以下の通り妥結した[72]。呉佩孚、張作霖の中国軍をモンゴルの領域に入れないことにする[73]。もし白軍徒党の軍が満洲里やハイラルで無法を働くならば、我がロシア軍が十分な数で満洲里とハイラルの領域を直ちに占領する[74]。

この書簡は、リンチノがモンゴル駐在ソヴィエト・ロシア全権代表 H. M. リュバルスキーから聞いた極東共和国各州各市代表の協議の内容を、スフバートルに伝達したものである。リンチノは、張作霖や、外モンゴルに近い満洲の地域における反ボリシェヴィキ派の動向の危険性を注視し、それに関する極東共和国の決定を、人民政府の軍事に携わるスフバートルに伝えているのである。

張作霖に対するリンチノの認識については、人民政府成立後間もない 1921 年７月 16 日の政府会議議事録にも見ることができる。本会議の第３項において、セツェン・ハン部[75]にいる反ボリシェヴィキ派の軍の掃討に関連してリンチノは、隙を突いて張作霖が進入してくる可能性があるため、軍を派遣して防衛すべきであることを主張した[76]。リンチノは、張作霖が外モンゴル東部を侵犯し得る危険な勢力であると認識していたようである。

以上のように、オフチンがソヴィエト・ロシア、外モンゴルに危険をもたらしうると懸念した反ボリシェヴィキ派の動向や満洲の情勢に対して、リンチノも同様の危機意識を抱き、ボドー事件にも関連するものと捉えていたのである。

70　書簡内で 1922 年９月 13 日のモンゴル駐在ソヴィエト・ロシア全権代表 H. M. リュバルスキーの外モンゴル到着に触れられているので、その直後に作成された書簡だと思われる。

71　人民党の創設に関わったメンバーの１人。ダンザンのグループに属していた。人民政府では、全軍司令官、軍務相を務めた。

72　極東共和国各州各市の代表達が協議して妥結した、という意味である。

73　リュバルスキーが中国軍をモンゴル領内に入れない、と言ったことについて、ツェレンドルジも 1922 年９月 14 日の日記に記録している（20-иод оны тэмдэглэл p.116）。なお、この日記の項目を 20-иод оны тэмдэглэл では印字のミスで 1924 年としているが、明らかに 1922 年である。

74　Ринчино p.66.

75　当時、外モンゴルはハルハ４ハン部、ドゥルベド２部等から形成されていた。セツェン・ハン部はハルハ４ハン部の内の最東部、即ち満洲に隣接する地域で遊牧していた集団である。

76　YTA Ф. 1, Д. 1, XH. 7, X. 1.

おわりに

本稿では、人民政府成立直後に発生した重要な政治事件であるボドー事件の過程において、事件に対処したオフチンがこの事件と外モンゴルを取り巻く情勢、特に反ボリシェヴィキ派の動向との関係をどう考えていたかを検討し、当時の外モンゴルの政治情勢と国外情勢の関係について考察した。

オフチンは、外モンゴル情勢を判断する際に、国外情勢をまず考慮していた。そして、セミョーノフら反ボリシェヴィキ派、張作霖、日本のつながりを、ソヴィエト・ロシアや人民政府に危機をもたらす存在と位置づけ、外モンゴルの王公、高位僧、ボグド・ハーンやボドーの活動と結びつけた。これが一因となり、オフチンはボドーの活動に強い危機意識を抱くに至ったのだと考えられる。このオフチンの認識は、ソヴィエト・ロシアの他の政治家の間でも広まっていた。また、リンチノも同様の認識を有しており、人民党、人民政府でも同様の危機意識があったことがうかがえる。

ロシア内戦と列強の干渉戦争が終息に向かい、外モンゴルでもウンゲルンらが駆逐されていたため、人民政府成立以降にロシア内戦の影響が外モンゴルの政治情勢に大きな影響を及ぼしたとは通常考えられてこなかった。しかし、本稿で検討した通り、反ボリシェヴィキ派は依然として存在しており、外モンゴルへの関与を試みていた。また、そこには、張作霖、日本の関与も疑われていた。この状況が孕む危険性をオフチン、リンチノらは認識し、ソヴィエト・ロシアや人民政府の存在を脅かしうる政治的に重大な事件が外モンゴルで発生した場合、このような情勢との関係を考慮しながらその事件に対処したのであろう。本稿で論じた通り、このような彼らの姿勢が、ボドー事件への対応に見出される。オフチンらにとって、反ボリシェヴィキ派、張作霖、日本が外モンゴルの政治情勢に強く影響しうることを具現化した政治事件がボドー事件であった、とも言えるであろう。

反ボリシェヴィキ派や張作霖が外モンゴルに関与しうる状況の下で、人民政府はモンゴル人国家建設を開始した。そして、ソヴィエト・ロシアはこれらに対する危機意識から、ボドー事件に積極的に対応した。ソヴィエト・ロシアと反ボリシェヴィキ派の対立が、外モンゴルの政治事件の展開にも作用し、外モンゴルの政治情勢を形成していたことになる。こうして、外モンゴルの政治情勢に、セミョーノフ、張作霖、日本が結びつく場とされた満洲の動向が影響を及ぼす構造が、人民政府成立初期にできつつあった。このような形で満洲は危険な地域であるという認識が、ソヴィエト、人民政府において形成されていったのであろう。

このように、人民政府成立初期には、ロシアの内戦と外国の干渉戦争がなお残存していた。当時の政治事件を分析し、外モンゴルの政治情勢を考察する際には、このことを考慮する必要があるだろう。

＊宮崎県立図書館所蔵黒木親慶文書は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの兎内勇津流准教授の御協力により、本稿で利用することができた。ここに記して謝意を表したい。なお、本研究は JSPS 科研費 JP19H01455 及び JP19K01016 の助成を受けた。

史料、参考文献

・史料

黒木文書：宮崎県立図書館所蔵黒木親慶文書

ГХТА：モンゴル国外務中央文書館所蔵史料

YTA：モンゴル国立中央文書館所蔵史料

АВПРФ：ロシア連邦外交政策文書館所蔵史料

РГАСПИ：ロシア国立社会政治史文書館所蔵史料

・刊行史料集、回想録

20-иод оны тэмдэглэл: Дэмбэрэлийн Өлзийбаатар эмхт. *XX зууны 20-иод оны тэмдэглэлүүд. Баримтын эмхтгэл.* Улаанбаатар. 2007.

ВКНДК1: Го Хэнъюй, М. Лёйтнер, Р. Фельер, М. Л. Титаренко, К. М. Андерсон, В. И. Глунин, А. М. Григорьев ред. *ВКП(б), Коминтерн и национально-революционное движение в Китае. Документы.* Т.1. 1920-1925. Москва. 1994.

Ринчино: Б. В. Базаров, Б. Д. Цибиков, С. Б. Очиров ред. *Элбек-Дорджи Ринчино о Монголии.* Улан-Удэ. 1998.

Семенов: Атаман Семенов. *О себе. Воспоминания, мысли и выводы.* Москва. 1999.

・参考文献

青木 2011：青木雅浩、『モンゴル近現代史研究 1921 ～ 1924 年―外モンゴルとソヴィエト、コミンテルン―』、早稲田大学出版部、2011.

青木 2015：青木雅浩、「外モンゴルから見た満洲――九二〇年代」、加藤聖文、田畑光永、松重充浩編、『挑戦する満洲研究―地域・民族・時間―』、東方書店、2015.

生駒 1994：生駒雅則、「シベリア内戦とブリヤート・モンゴル問題」、『スラヴ研究』41、1994.

スラヴィンスキー 2002：ボリス・スラヴィンスキー、ドミートリー・スラヴィンスキー著、加藤幸廣訳、『中国革命とソ連。抗日戦までの舞台裏【1917-37 年】』、共同通信社、2002.

橋 2011：橋誠、『ボグド・ハーン政権の研究―モンゴル建国史序説 1911-1921』、風間書房、2011.

寺山 2017：寺山恭輔、『スターリンとモンゴル 1931-1946』、みすず書房、2017.

原 1989：原暉之、『シベリア出兵―革命と干渉 1917-1922』、筑摩書房、1989.

広川 2010：広川佐保、「1920 年代、内モンゴルにおける制度変革とモンゴル王公―北京政府、張作霖との関係から」、『東洋学報』91-4、2010.

二木 1995：二木博史、「リンチノとモンゴル革命」、『東京外国語大学論集』51、1995.

二木 1997：二木博史、「大モンゴル国臨時政府の成立」、『東京外国語大学論集』54、1997.

Аоки2019：М. Аоки. А. Я. Охтины илтгэл дэх Богд хаан ба Д. Бодоогийн хэрэг явдал. Ответственные редакторы выпуска С. Л. Кузьмин, О. Батсайхан. *Институт Богдо-гэгэна в истории Монголии. К 150-летию Богдо-гэгэна Джебцзундамба-хутухты VIII–последнего великого хана монголов.* Москва. 2019.

Баабар1996：Баабар. *XX зууны Монгол.* Улаанбаатар. 1996.

Батбаяр1998：Цэдэндамбын Батбаяр. *Монгол ба Япон. XX зууны эхэн хагаст*. Улаанбаатар. 1998.

Бат-Очир1991：Л. Бат-Очир. *Бодоо сайд: үзэл ба үйлс.* Улаанбаатар. 1991.

Батсайхан2007：Эмгэнт Оохнойн Батсайхан. *Монгол үндэстэн бүрэн эрхт улс болох замд. 1911–1946.* Улаанбаатар. 2007.

Батсайхан2014：Эмгэнт Оохнойн Батсайхан. *Монголын сүүлчийн эзэн хаан VIII Богд Жавзандамба. Амьдрал ба домог.* Улаанбаатар. 2014.

БНМАУ3：БНМАУ-ын ШУА-ийн Түүхийн хүрээлэн. *Бүгд найрамдах Монгол ард улсын түүх.* 3. Улаанбаатар. 1968.

Дамдинжав2006：Д. Дамдинжав. *Элбэгдорж Ринчино гэгч хэн байв.* Улаанбаатар. 2006.

Даш1990：Д. Даш. *Солийн Данзан.* Улаанбаатар. 1990.

Жабаева/Цэцэгмаа2006：Л. Б. Жабаева, Ж. Цэцэгмаа. *Монголын ардын хувьсгалын үйл хэрэгт Буриадын үндэсний сэхээтнүүдийн гүйцэтгэсэн түүхэн үүрэг.* Улаанбаатар. 2006.

Жамсран1997：Хэрээд Л. Жамсран. *Монголын төрийн тусгаар тогтнолын сэргэлт.* Улаанбаатар. 1997.

МУТ5：Ж. Болдбаатар, М. Санждорж, Б. Ширэндэв ред. *Монгол улсын түүх.* 5. Улаанбаатар. 2003.

Ширэндэв1999：Б. Ширэндэв. *Монгол ардын хувьсгалын түүх.* Улаанбаатар. 1999.

Базаров/Жабаева2008：Б. В. Базаров, Л. Б. Жабаева. *Бурятские национальные демократы и общественно-политическая мысль монгольских народов в первой трети XX века.* Улан-Удэ. 2008.

Белов2003：Евгений Белов. *Барон Унгерн фон Штернберг. Биоглафия, идеология, Военные походы 1920–1921 гг.* Москва. 2003.

Ганин2004：А. В. Ганин. *Черногорец на русской службе: генерал Бакич.* Москва. 2004.

ИМ: Р. Б. Рыбаков глав. ред. *История Монголии. XX век.* Москва. 2007.

Кузьмин2011：С. Л. Кузьмин. *История Барона Унгерна: Опыт реконструкции.* Москва. 2011.

Кузьмин2016：С. Л. Кузьмин. *Теократическая государственность и буддийская церковь Монголии в начале XX века.* Москва. 2016.

Лузянин2003：С. Г. Лузянин. *Россия-Монголия-Китай в первой половине XX в.* Москва. 2003.

Рощин1999：С. К. Рощин. *Политическая история Монголии.* Москва. 1999.

Рощин2002：С. К. Рощин. Из истории становления советско-монгольских дипломатических отношений（1921-е гг.）. *Международый конгресс монголведов（Улан-Батор, 5–12 августа 2002 г.）. Доклады российской делегации.* Москва. 2002.

Цветков2019：Василий Цветков. *Белое дело в России: 1920–1922гг.* Москва. 2019.

Bawden1968：C. R. Bawden. *The Modern History of Mongolia*. London. 1968.

Dashpurev/Soni1992：D. Dashpurev, S. K. Soni. *Reign of terror in Mongolia 1920–1990*. New Delhi. 1992.

Rupen1964：Robert A. Rupen. *Mongols of Twentieth Century*. Bloomington. 1964.

Sablin2017：Ivan Sablin. *Governing Post-Imperial Siberia and Mongolia, 1911–1924. Buddism, Socialism, and Nationalism in State and Autonomy Building*. New York. 2017.（First published 2016）

Sandag/Kendall2000：Shagdariin Sandag, Harry H. Kendall. *Poisoned Arrows. The Stalin-Choibalsan Mongolian Massacres, 1921–1941*. Boulder. 2000.

キーワード　モンゴル人民政府、モンゴル人民党、ソヴィエト・ロシア、ロシア革命、政治事件、国際関係